

漢 かん

江 こう

杜 と

牧 ぼく

溶溶漾漾ようようようようとして白鷗飛はくおうと

緑浄みどりぎよ春深はるふこ好よ衣こもも染そ

南去北来人自なんきよほくらいひとおのづか老お

夕陽長せきやうとこしな送おく釣船ちぼうせんの帰かえ

【作者】杜 牧(八〇三〜八五二年)晩唐の詩人、字は牧之(ほくし)、号は樊川(はんせん)、京兆万年(陝西省長安県)の人。名家の出身にして

八二八年進士に及第後、地方、中央の官を歴任し中書舎人となつて没す。年五十歳。資性剛直、容姿美しく歌舞を好み、青楼に浮名を流したこともあつた。樊川文集二十卷、樊川詩集七卷あり、阿房宮賦(あぼうきゆうふ)は早年の作にして文名を高めた。

【語釈】*漢 江::川の名 中国陝西(せんせい)省寧羌(ねいきやう)県に発し湖北省の漢口で揚子江に注ぐ

*溶 溶::水のさかんに流れるさま *漾 漾::水の波立ち動くさま *白 鷗::白いかもめ

*緑 浄::緑色の水が美しくすみきつていること

【通釈】漢江の水はさかんに波立ち流れて、その上を白い鷗が飛んでいる。春景色もようやく深まり、美しい緑色の流れは、衣を染めたいくらいである。しかし世の人は、この好景にも、南へ北へと忙しく往来して、心のゆとりもなく老いてゆくようであり、一層の悲痛を感じるのである。ふと見ると西に傾いた太陽は、その影長く、釣りから帰って来る船を送っている。